9 月 11 日のメッセージ

聖書：コリントの信徒への手紙一　12： 27 – 13:　13

「愛は決して滅びない」

既得権の様々な誘惑に打ち克ち、「新しい人」を着続ける者にとって「最高の道」とはどのような生き方でしょう。もちろん、神を神とし、神にのみ依り頼むこと、それが最高の道と言えるでしょう(「民よ、どのような時にも神に信頼し／御前に心を注ぎ出せ。神はわたしたちの避けどころ。」詩編 62:9)。

イエスはそのことを「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」(マルコによる福音書 12:30)と言われました。神に信頼し、神に委ねることはわかります。しかし、「神を愛する」とはどのように生きることでしょう。

神は人間を愛しておられます(「まだ幼かったイスラエルをわたしは愛した。エジプトから彼を呼び出し、わが子とした。」ホセア書 11:1)。それは、人が神のことを知ろうと知るまいとに関わらずです(「エフライムの腕を支えて／歩くことを教えたのは、わたしだ。しかし、わたしが彼らをいやしたことを／彼らは知らなかった。」ホセア書 11:3)。そして、どれほど神に背き、神など必要ないとうそぶいても、神は決して見捨てられることはありません(「ああ、エフライムよ／お前を見捨てることができようか。イスラエルよ／お前を引き渡すことができようか。……わたしは激しく心を動かされ／憐れみに胸を焼かれる。」ホセア書 1:8)。

ここから「愛」がわかってきます。愛とは「好む、好まない」の次元ではありません。「利益がある、ない」の次元でもありません。たとえ相手がどのような状態であろうとも、また自分がどのような状態であろうとも、相手のことを思い、信頼することです。イエスは自分の置かれた状況に囚われることなく、全人格をもって神と向き合うことを教えられたのです。

それと同じくらい大切な掟が「隣人を自分のように愛しなさい」(「第二の掟は、これである。……この二つにまさる掟はほかにない。」マルコによる福音書 12:31)です。当然、こちらも同じように「愛する」とありますから、神との関係と相似形になります。少し異なるのは、人間には多様なあり方があることでしょう(「神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、……」コリントの信徒への手紙一 12:28)。それぞれがそれぞれとして存在し、価値も意味もあります。

しかし、人間はつい、他者と比較して優位に立とうとしてしまいます。言うまでもありませんが、その姿勢は間違っています。「わたしたちの知識は一部分、預言も一部分だから」(コリントの信徒への手紙一 13:9)です。人間の小賢しい知識や知恵など、本当の関係の中では大きな差異とはなり得ません。むしろ、「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分」(コリントの信徒への手紙一 12:27)であることを思い、互いに愛し合うことが大切です。

「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である」(コリントの信徒への手紙一 13:13)。なぜなら、「愛は決して滅びない。」(コリントの信徒への手紙一 13:8)からです。仮に一時、失われたように見えることもあるかもしれません。それでも、愛は決して滅びないのです。神との、また人間との関係は必ず修復され、愛の関係を結ぶことができるようになります。

もちろん、「いつ回復されるのか」は人間の身にはわかりません。それでも、愛の関係を求めて私たちは今日も生きています。ですから、インスタントに「暴力に依存するな。搾取を空しく誇るな。力が力を生むことに心を奪われるな」(詩編 62:11)。

「愛は忍耐強い」(コリントの信徒への手紙一 13:4)のです。少なくとも自分の内から愛を滅ぼしてしまわないように、しっかりと神を見上げ、隣人と向き合って生きて参りましょう。